

ジャン・クロード・シルベマン

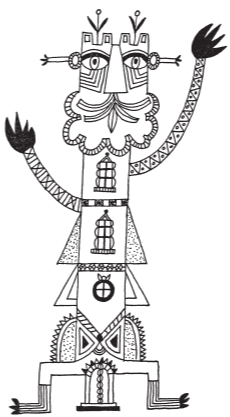
ポエジーと革命…………… 齊藤哲也
Jean-Claude Silbermann (1935-) ブローニュ・ビヤンクール(フランス)に生まれる。詩人、画家。五〇年代の半ばに二〇代でシュルレアリスム・グループに加わり、以後、五〇―六〇年代にひらかれた数々の「シュルレアリスム国際展」、五月革命、そしてグループの解体という事件をへシュルレアリストとして生きる。プルストンの死後、さらにグループの解体後もシュルレアリストとして活動しつづけるとはいかなることなのかを真剣に問い、なお現在も活動をつづけるこの人物を通して、二十一世紀のシュルレアリスムを考察する。

フルーリ・ジョゼフ・クレパン

精霊たちの煌めく楽園…………… 長谷川晶子
Fleury Joseph Crepin (1875-1948) エナン・リエタール(フランス)に生まれる。画家。鉛管工だったが、六十三歳のときに突然絵を描きはじめる。プルトンが「聖なるもの」と讃えたクレパンの絵画は、真珠に似た無数の光り輝く点に彩られた楽園を形成している。シュルレアリストたちを魅了したその魔術的創造力の根源を心靈主義やアー・プリュットとの関わりから探求する。

カレル・タイゲ

ポエジーの探求者…………… 阿部賢一
Karel Teige (1900-1951) プラハ(チェコ)に生まれる。芸術理論家、装丁家、コラーージュ作家。詩人ネズヴァルらとともにチェコ・シュルレアリスムの礎を築き、さらには建築批評、タイポグラフィ、芸術社会学など、多岐にわたる活動を繰り広げた。チェコ前衛芸術の頭脳として多彩な才能を発揮したその存在は、シュルレアリスムという運動体の中でも異彩を放っている。主要著作を読み解くと同時に、プラハというシュルレアリスムの磁場の解析を試みながら、彼が生涯探求した(ポエジー)を問う。



ルネ・ドーマル

静かなる聖戦…………… 谷口亜沙子
René Daumal (1908-1944) プルジクール(フランス)に生まれる。詩人、作家、批評家。(大いなる賭け)の創立者のひとりであるルネ・ドーマルの軌跡は、グループの崩壊後にも続いていた。二作の小説「大いなる酒宴」「類推の山」のほか、戦時中に書かれた長詩「聖戦」、評論「言葉の力」などをめぐり、シュルレアリスムと関わった時期だけでなく、ドーマルの代表作を生み出した後半生の詩学に迫る。

ジュール・モノロ

知性の葛藤…………… 永井敦子
Jules Monnerot (1908-1995) フォールド・フランス(マルティニーク島、フランス)に生まれる。社会学者、作家、高等学校卒業後パリで学び、三〇年代にアンティル諸島出身のエリート青年グループ、シュルレアリスム運動、バタイユらの社会学研究会と関わっては離脱。『現代詩と聖なるもの』はシュルレアリスムの基礎文献となるも、その著者の来歴は問われず、後に「ルベンの協力者」の烙印を押され、黙殺されてきた。自らも追求するアイデンティティと他者から与えられるそれとの間でもがき続けた知識人の生涯と思索を明るみに出す。

〈シュルレアリスムの25時〉第一期(全十巻、価格税別)

- ジョゼフ・シマ 無音の光…………… 谷口亜沙子
一切が溶けあう光の表現へと到達し、「ただひとつの世界」を映した境界の画家が、いま、ここに浮上する。 三二〇〇円
- クロード・カーアン 鐘のなかのあなた…………… 永井敦子
仮面や鏡を使って偽装したセルフポートレート等で再発見された、革命的な写真家・作家・思想家の実像に迫る。 二五〇〇円
- マクシム・アレクサンデル 夢の可能性、回心の不可能性…………… 鈴木雅雄
シュルレアリスムか、神か——信仰と思想のあいだで引き裂かれながらも、模索し創作をつづけた詩人の足跡を辿る。 二八〇〇円
- ルネ・クルヴェル ちりぢりの生…………… 鈴木大悟
生粋のロマンティストにして異端のシュルレアリストだった天才作家の人生と作品を、「弁証法」的に照射する。 三〇〇〇円
- ヴィクトル・ブローネル 燐光するイメージ…………… 齊藤哲也
いまもなお、深い闇の中で鈍い光を発する《魔術的画家》。左目を失い、一度は除名を宣告された画家の軌跡を描く。 三五〇〇円

ミシェル・ファルドゥーリス・ラグラランジュ

神話の声、非人称の声…………… 國分俊宏
Michel Fardoulis-Lagrange (1910-1994) カイロ(エジプト)に生まれる。詩人、作家。ジャン・マケとともに雑誌「三等列車」を創刊したこのギリシア人は、バタイユの盟友でもあり、シュルレアリスムから距離を置きながらも、このグループの運動を強く意識し続けた。晦渋で秘教的ともいえるその文体は、ギリシア神話や聖書をモチーフに取り込みながら、まったく独自の孤高の世界を築き上げていく。(へ)にして全なる)世界を志向し、言葉によって事物の根源へと遡ることを夢見た詩人の(小説詩)(レリス)から、言語の極北を思考する。

ジゼル・プラシノス

ファミリアンファンの逆説…………… 鈴木雅雄
Gisèle Prasinós (1920-2015) イスタンブール(トルコ)に生まれる。詩人、小説家。誰に語られるでもなく自動記述を實踐し、シュルレアリストたちに賞賛された十四歳の少女は、奇妙なお伽噺を紡ぎ出す力を徐々に失って、文学の世界から一度は離れるが、やがて小説家として、また特異な壁掛けやオブジェの作り手としてふたたび自らを見出した。自立したアイデンティティの確立などともかけ離れた、自らの幼年時代とつきあうための、倒錯的だがどこまでも楽しげな彼女の探究が意味したものを追う。

クロード・タルノー

逃走線と神話…………… 鈴木雅雄
Claude Tarnaud (1922-1991) メゾン・ラフィット(フランス)に生まれる。詩人、作家。四七年の展覧会や機関紙「ネオン」の刊行において中心的な役割を果たしながら、マッタの除名に際してブローネルらとともに脱退し、その後世界各地を転々としつつも、スタニスラス・ロダンスキーやゲラシム・ルカとの強い精神的な絆のなかで、一つの神話を生きるように自らのシュルレアリスムを生きた芸術家。「客観的偶然」の理論と実践を更新した、秘められたシュルレアリストの軌跡をたどる。

ミシェル・カルージュ

至高点をめざす二つの道…………… 新島進
Michel Carrouges (1910-1988) ポワティエ(フランス)に生まれる。批評家、作家。カトリックながらシュルレアリスムに深く傾倒。その交点から生まれた(独身者機械)論は、人の機械化と孤独化が進む現代においてその先見性が再評価されている。神秘思想とシュルレアリスム、ひとりの知識人のなかで錯綜し、至高点をめざした二つの道の行方を探る。

エルヴェ・テレマック

形象の冒険…………… 中田健太郎
Hervé Télémaque (1937-) ポルトープランス(ハイチ)に生まれる。画家。五〇年代後半からニューヨークで美術を学び、抽象表現主義の退潮を感じたテレマックは、人種差別を感じて六〇年代初頭にパリへと移ったのちも、むしろ具象的な形態という課題を追いかけつづける。六〇年代のシュルレアリスムに、そして(フランス版のポップ・アート)と言われる)フィギュラシオン・ナラティヴに、一時期同時に係わったその足跡をたどり、現代美術における形象の可能性を浮かびあがらせる。

ロジェ・シルベール・ルコント

虚無へ誘う風…………… 谷昌親
なせシュルレアリスムなのか——アヘン中毒、東洋への傾倒、ブルトン批判というスキャンダラスな詩人の肖像。 三五〇〇円

ヴォルフガング・パレーン 幻視する横断者…………… 齊藤哲也
メキシコ亡命時、インディアンへとまなざしを向けた稀有な画家・思想家を、美術史の流れの中に逆照射する。 三五〇〇円

ゲラシム・ルカ ノン・オイデイブスの戦略…………… 鈴木雅雄
ドゥルーズが賞讃した驚異の「吃音」詩群を残し、シュルレアリスムを大胆に作りかえた知られざる詩人の試みを追う。 二五〇〇円

ジルジュ・エナン 追放者の取り分…………… 中田健太郎
エジプト・シュルレアリスム運動を牽引した詩人、批評家・ジャーナリストの生涯と作品から現代詩を問い返す。 三〇〇〇円

ジャン・ピエール・デュレー 黒い太陽…………… 星椋守之
空前の言語操作の果てに二十九歳で自殺した「呪われた詩人」を、戦後シュルレアリスムを概観しながら紹介する。 二五〇〇円